

## 図書館機能「学び・居場所・協働・情報拠点」を強化 「豊岡市図書館未来プラン」策定

本市は、図書館のあり方を定めた「豊岡市図書館未来プラン」を策定しました。

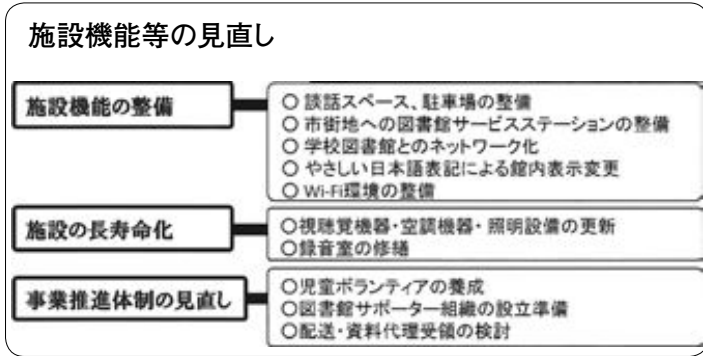
図書館本館は、現在地に移転して、18年が経過します。この間、図書資料の収集や貸し出しの他、子どもたちへの読み聞かせや映画会の開催など、幅広く事業を展開してきました。しかし、近年の人口減少や本離れに伴い利用者が減少しています。



▲豊岡市図書館未来プラン

の暮らしを楽しみむ人が増えている」と定め、図書館の機能強化を図ります。

取組期間は、平成29年度から平成33年度までの5年間。談話スペースなどの施設整備の他、新しい市民活動組織などの設立を目指します。



## 「一番身近な就職活動の良きサポーターとして」 「保護者のための就職活動勉強会」開催

2月19日、豊岡稽古堂で、大学生や専門学校生らの保護者を対象に「保護者のための就職活動勉強会」を開催しました。

学生の就職活動は「社会人に進んでいく第一歩」。参加者は、就職情報会社の㈱マイナビの担当者から、保護者にしかできないサポート方法や、就活スケジュールなどの説明を受けました。

また、この勉強会では、Uターン就職に向けた意識を高



▲メモを取りながら説明を聞く保護者

## 南三陸町の震災復興を応援 市内の学校給食に南三陸産「シロサケ」

東日本大震災で甚大な被害を受けた南三陸町(宮城県)。本市は、震災復興支援の一環として、3月7日、市内の小・中学校、保育園の計17校園の給食に、南三陸町漁業の主力魚種、シロサケ(秋サケ)のフライを使用しました。

子どもたちは、おいしそうに大きなフライをパクツ。来年度は、市内の全ての市立小・



▲サケフライを食べる子どもたち

## 主な市政の動き

- 【2月】
- 14日・豊岡市男女共同参画社会推進懇話会
  - 16日・「植村直」冒険賞受賞者発表
  - 17日・豊岡市公営企業審議会
  - 17日・豊岡市障害者福祉計画策定委員会
  - 17日・豊岡市地域福祉計画策定委員会
  - 19日・豊岡市都市計画審議会
  - 19日・保護者のための就職活動勉強会
  - 21日・モンゴル国ボクシング連盟事前視察(22日)
  - 23日・豊岡市文化芸術振興計画策定委員会
  - 24日・豊岡市地域公共交通会議
  - 26日・とよおか地域づくり大会2017
- 【3月】
- 1日・市内全域の豪雪災害警戒本部廃止
  - 3日・市議会定例会開会(29日)
  - 4日・移住促進イベント「飛んでるローカル子どもワークショップ」(東京都目黒区)
- ・Leading for change Symposium(イストラエル)市長講演(27日)

# 「飛んでいけ。そして、大きくなって、飛んでるローカル豊岡に戻ってこい。」 市内各所に「わかもの巣立ち応援プロジェクト」ポスター掲示

移住定住促進プロモーションの一環として「わかもの巣立ち応援プロジェクト」ポスター（10種類）を製作しました。高校卒業などで、豊岡を巣立つ若者に、市民からエールを送ります。

自由には羽ばたくときがやってきた。「可能性だらけのあなたに、豊岡も負けていられない。」「あなたが帰りたくなるまちを目指して。」「私たちもこのまちで頑張ります。」などの言葉を並べています。

ポスターは、3月末まで駅や商店街、高校などに掲示しています。



## 中貝市長の徒然日記 ⑪⑬

### イスラエル通信 ①

イスラエルに行ってきた。 「変化への先導」というシンポジウムに、ゲストスピーカーとして参加してきました。テルアビブから北に車で1時間ほど行った、ジフロン・ヤコブ市が会場でした。

招待が届いてから調べてみると、一部地域に、外務省の「渡航中止勧告」が出ています。「おっとろっしや！」

家族や秘書係が反対する一方、熱烈なラブコールが続きました。「さまざまな価値観が交錯する中で、コウノトリ野生復帰をなぜ実現できたのか？ 農業を使わない農業をなぜ進めることができたのか？ あなたが果たした役割を話してほしい」「ここまで言われたら、断れんですね」と秘書係。

最後は外務省中東担当課の方から「素敵な国です。いい意味で期待を裏切られると思います」とお聞きし、一人旅の不安を抱えながらも、果敢に旅立ったのであります。

に力と力による対立ではなく、平和的プロセスで社会の変化をもたらすことができるはずだという信念と実践がテーマのシンポジウムでした。

100人程の会場が立ち見も出る超満員となりました。ぼくのたどたどしい英語でも、過去最高の反応でした。笑いと拍手が随所で沸き起こり、豊岡のコウノトリ野生復帰は、世界でも稀な、奇跡的成功例として受けとめられました。

「対話とコミュニケーションを通じて、違いを認め合い、協働し、夢を共有することができると信じます」というメッセージは、共感をもって受け入れられたと思います。

終了後、高校生くらいのかわいらしい女の子が二人寄ってきました。ベドウィンと呼ばれる、砂漠に住む民の学校の生徒たちでした。「ぜひ私たちの学校に来て、私たちの課題を一緒に考えてください」

それは、とても嬉しい誘いでした。でも、「ごめんね、明日、日本に帰らなくちゃいけないので」泣く泣くお断りしたのであります。(続く)